

## 認知意味論によるとりたて詞「も」の特殊な組み立て：「XもX、YもY」を中心に

王，淑貞  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494668>

---

出版情報：比較社会文化研究. 23, pp.1-11, 2008-03-01. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン：  
権利関係：





や「白いビルの3階」などのような表現は会話の中で頻繁に使われるため、ごく一般的であると言えるだろう。これらのうち、「正門」、「博多駅」と「マクドナルド」及び「白いビル」が、話者や聞き手などの概念化者もしくは認知主体<sup>6</sup>にとっては目立つ、あるいはわかりやすい目印として機能している。それによって実際に示す「すし屋さん」や「バスセンター」や「バス停」や「3階」などは、他の「すし屋さん」や「バスセンター」、「バス停」、「3階」などからはっきり区別されている。この場合の「正門」、「博多駅」、「マクドナルド」や「白いビル」などの目印はまさに参照点である。こうした参照点の設定も、人間の概念化特性の表れの一つであると言える。このように、概念化者もしくは認知主体の間で注意や意識を向けるそれが認知できる領域内に存在・関連し、より知覚されやすい物事（参照点）を通して注意や意識を向けるそれを指示するのは人間の基本的認知能力の一つである。Langacker(1993)は、この能力を参照点能力と呼んでおり、参照点と指示する対象との関係を図1の参照点構造で表している。

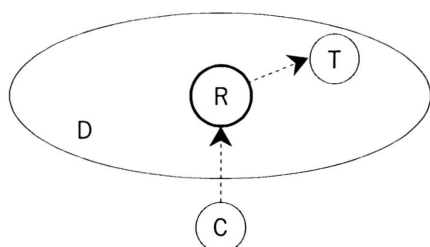


図1 (Langacker1993: 6)

図1では、Cは概念化者もしくは認知主体 (conceptualizer)、Rは参照点 (reference point) を表し、Tは指示対象 (target)<sup>7</sup>を示す。楕円形の領域(D)は認知領域 (cognitive domain)<sup>8</sup>であり、指示対象が潜在的に存在しうる範囲を示す。また、破線の矢印は、概念化者もしくは認知主体が参照点を通して指示の対象へ辿る心的経路 (mental path) を表す。

この参照点能力は人に道を教えることや人を探ることなどから言語使用にかけて様々な面で活用されている。このことから、人間の認知的な営みにおいて重要な役割を果たすと言えよう。また、上記からもわかるように、参照点として選ばれるものは、認知的に際立つものであるし、実際の指示対象と何らかの意味で関係付けられるものである。すなわち、より際立つものが注意の焦点となりやすく、「参照点」として選ばれ、実際に指示される対象を表すのである。図1では、目立つ参照点が太線で表されている。

## 2.2 メトニミーと参照点の関係

Langacker (1993) は様々な言語表現にも「参照点構造」の心的操作が反映されていると指摘している。次のような例を挙げてみよう。

- (5) ピアノを弾いた。(ピアノの鍵盤)
- (6) 市長、何度も腕時計を見る。(時間)

これらの例では、「ピアノ」と「腕時計」はそれぞれ実際に (ピアノの鍵盤) と (時間) のことを指示している<sup>9</sup>。つまり、(5)の場合、実際に弾くのは「ピアノの鍵盤」であるが、認知的に「ピアノ」全体が「ピアノの鍵盤」より目立ちやすいため、「ピアノ」全体を参照点として「ピアノの鍵盤」という部分を表しているのである。また、(6)では、腕時計という具体的なものが時間という抽象的な概念より知覚されやすくかつ具体的なものであるため、それを参照点として時間を示しているのである。これは、認知的に際立ったもの (ピアノ、腕時計) を参照点として言語化し、それと関係する要素の集合の中から「弾く」、「見る」と最も直接的に関係する「ピアノの鍵盤」、「時間」という要素を指示対象として選び出し、それに注意の焦点を向けるようにするというわけである。このような概念関係は、「全体・部分」、「計器・計られるもの」といったような近接性の関係にある。すなわち、近接性の連想に基づくメトニミー<sup>10</sup>と認知的際立ちの原則による表現である<sup>11</sup>。人間の、普段の、言語活動や、思考や行動の仕方などにおいてメトニミーの概念は重要な役割を果たしている。メトニミーの概念により人間はあるものを、他のものと関連づけて概念化することができるのである。

ここからわかるように、メトニミー構造は、参照点はただある対象を指示するだけではない<sup>12</sup>とする参照点構造と同質のものである。このように、指示されているものの特定の面に、より一層注意を集中させ、理解できるよう導く。

## 2.3 焦点と活性領域の不一致

2.2節で見た(5)と(6)のように、参照点として焦点化される「ピアノ」と「腕時計」がそれぞれ実際に「ピアノの鍵盤」と「時間」という部分を指示している。ここからわかるように、(5)と(6)に表されている関係では、「弾いた」や「見る」などの行為に直接関係するのは指示対象の方である。この場合の「ピアノの鍵盤」や「時間」は、ある表現関係に直接関係していると思われる箇所、活性領域 (active zone ; az と省略) と呼ばれる。よって、(5)では、「ピアノを弾いた」という表現関係に対して「ピアノの鍵盤」は実際に指示される領域となる。そして、(6)の場合、「腕時計」に対し、「時間」が活性領域となっていると言える。このような、焦点化される部分、すなわち参照点と活性領域が違うという現象は、「焦点と活性領域の不一致」<sup>13</sup>である。こうした現象が起こるのは、意思伝達上の必要性と認知上の傾向とのつり合いが取られるためである<sup>14</sup>。

また、活性領域は直接焦点化された物事の部分とは限ら

ない。人間の一般的な知識や文脈などによって理解される場合がある。例えば、

(7) トランペットを聴いた。(発した音)

のように、実際に聞いたのはトランペットから発せられた音である。しかし、トランペットの方が具体的で目立つため、トランペットという楽器全体を参照点としてその「音」を表す。よって、トランペットの「音」がトランペットの活性領域となっている。このように、トランペットの発した音はトランペットの部分ではなく、トランペットと関係するものである。つまり、活性領域が焦点化されるもの、いわゆる参照点に関係すればよいと言えよう<sup>15</sup>。このような表現関係については Langacker (1993) が図2のように示している。太線は焦点化される物事、すなわち焦点の部分を表すが、参照点 R と活性領域 az が太線で表されている。

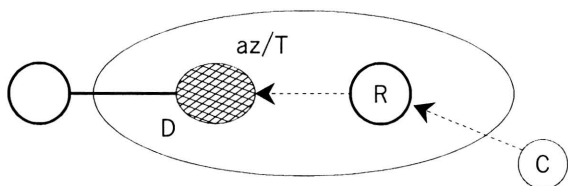


図2 参照点構造 (Langacker1993 : 33)

上記からもわかるように、参照点構造は多くの言語現象に関わっており、重要な役割を果たしている。そこで、本稿では参照点構造の概念に基づいて、「X も X、Y も Y」構文の意味用法が体系的に解釈できることを示す。

### 3. 「X も X、Y も Y」構文の意味用法

「X も X、Y も Y」構文の意味用法については辞書や文法書などにより下記のようなタイプが見られる。また、「X も X、Y も Y」構文の表現は、a-1~b のようなタイプのほかに、c のように、一方だけを言って言外に他方をほめめかすという言い方もある ((11)、(12))。それぞれに該当する例が (8)~(12) のようである。

a-1 「X (も) ~が、Y も Y だ」<sup>16</sup>

a-2 「X も X だが、Y (も) ~」

b 「X も X だが (なら)、Y も Y だ」

c 「Y も Y (、~)」

(8) 彼女も悪いが、君も君だ。(新和英中辞典)

(9) 子どもも子どもだが、親も悪い。(松村)

(10) 悪いといえば、君のおやじもおやじだが、君も君だ。(新和英大辞典)

(11) 反論 (のほう) も反論 (のほう) で、ひどいものだった。(明鏡国語辞典)

(12) 君も君ぢやないか、しっかりしろよ。(事情も事情だろうが) (松下)

(以上の下線は筆者)

このような「X も X、Y も Y」構文の表現は、単に文字通りに解釈すれば、何も伝えていないように思われるかもしれない。しかしながら、実際の言語使用にはその特有の意味がある。例えば、(8)のように、「君も君だ」は君が君であって、それ以外のものではない。何の情報も伝えていないように見える。だが、実際には、「君も君だ」は「君にも過ちがあるといった意味」である。すなわち、(8)で示されるように、前の先行文を前提として君を前の先行文の命題である彼女と比較して、同じように両方を非難し、両方は似たり寄ったりであるという意を表すのである。

但し、概念化においては、知覚的な注意の特性によって視界の範囲が限定されるから、このような一連のプロセスが背景化されており、表面的には、「彼女」と「彼」だけを知覚の部分から取り立てて表す。そのため、「君も君だ」は日本語だけでは理解が難しいと思われる。(8)と(10)の下につける英語を参照に意味を確かめると、わかりやすいだろう。

(8) 彼女も悪いが、君も君だ。(新和英中辞典)

(下線は筆者)

Both she and you are at fault./She is to blame, but so are you (but you are no less to blame)

(10) 悪いといえば、君のおやじもおやじだが、君も君だ。(新和英大辞典) (下線は筆者)

You are no less to blame than your father is.

(8)において、表面的に表される「君」と「彼女」は、一見直接的な関係がないように見えるが、実際にその背後で一連のプロセスを通して結び付けられ、両方が似たり寄ったりであるということがわかる。よって、「君も君だ」には、彼女が悪いけれども、君にも過ちがあって関係ないわけではないという含みがあると言える。したがって、「X も X、Y も Y」構文は、構文自体の全体性と特有の意味がある。

#### 3.1 実例分析

前節で見た辞書や文法書などからまとめた「X も X、Y も Y」構文のタイプに基づいていくつかの実例を取り上げて見てみよう。

(13) 最近親の感覚がずれてて、如何にも困る。確かに刺した男は悪い。…子どもを出してしまう親も親だ。

([http://www.blogs.dion.ne.jp/yumekui\\_kobito/archives/4022860.html](http://www.blogs.dion.ne.jp/yumekui_kobito/archives/4022860.html))

(13)において、話者は、ある高校生刺殺傷事件については、

子どもを刺した男性が悪いけれども、子供を気にかけず、また、子供が深夜外出して帰宅しない問題を放置している親も問題があり、責任は免れないと指摘する。

この事件については、深夜外出して帰宅しない高校生自身も悪いけれども、そのような子供に何も言わず、心配もしない親は、親の基本的な義務と責任及び問題を放置しているため、親の方にも問題があると言える。親は子供に無関心であり過ぎるため、高校生が深夜外出して、刺されたのかもしれない。それゆえ、高校生が刺された原因や理由は親の義務と責任及び問題を放置しているためであると言っても過言ではないだろう。このようにしてさかのぼって責任を追求すると、親にも大きな責任があるから、親は親の責任を棚に上げたまま、その男性だけを責めることはできない。そこで、(13)における「親も親だ」には、「確かにその事件は問題の男性に主な責任があるが、親自身にも責任があり、全くの無関係ではない」という含みがある。

ここからわかるように、親と、高校生を刺した問題の男性とは直接的に関係がないけれども、その事件に巻き込まれた子供を通して両者は関連しており、親の責任が追求されている。どうしてこうなるかと言えば、一般の社会通念によると、親は子供を守らなければならないし、子供の教育などには責任があるからであり、親と子供は連帯関係にあり、子供については親の責任が一番大きいからであろう。こうした概念や認識が活性化されることによって、子供に何かあった場合、連帯関係により親にも責任があると見なすのではないかと思われる。そのため、(13)において、子供より親のことが話者に非難されるのだろう。例えば、

- (14) …叱っただけなのに言葉の暴力だとかいってさ。あと、「うちの子はそんなことしません！」とかいう親！（まあ子供も子供ですけど）先生たちは何にも口出せなくなってるじゃないすか！そーゆー子供に育てたのはあんたたち、親なんだ！

(<http://www.nhk.or.jp/kktv-rb/bbsc/iwas/157/pagenw.html>)

のような場合、悪いことをしたのは子どもであり、しかも、それが親の命令や指示ではないけれども、一般の社会通念による親子の連帯関係に基づいて、この事件は親にも責任があると見なすことになるのではないかと思われる。それにまた、「うちの子はそんなことしません！」などと言うような親も子供に劣らない。そのような子供を育てた親もその程度だからである。表面的には子供の方には問題があるが、言外には親の方も負けず劣らず問題があるという含みがある。

このように、一般の社会通念による連帯関係のため、責任ということに対しては、親に一番責任があるということから親のことが非難されている。すなわち、子供を通して

親の責任を追及して親も同じく悪いと非難し、親のことを子供に引き比べて親と子ども両方が似たり寄ったりであるという意を表す。よって、「子供も子供です」に内在している含みがここでは書かれていないが、「YもY」にあたる「親も親」という行間の意の前提となる。また、子供と親が、自分のことを棚にあげて、全部の責任を他人に押し付け、咎めるようなことは非常識である。そこで、親と子どもともに常識から外れていると言える。

このことからわかるように、(14)で示された子供と親は、一般の社会通念によって同じ性質を持っているというような連想的近接性によって関係付けられている。子供と親との概念関係は連想的近接性に基づくメトニミーの概念関係におかれていると言える。

また、(15)を見てみよう。

- (15) (略)経理担当のアホねーちゃんが振り込むのを忘れていたような…まったく呆れたもので、そんなやつに経理をやらせてる会社も会社だよなあ（トオイメ）どんなに小さな会社でもふつうはあり得ない事だと思ってただけに…

(<http://diary.jp.aol.com/applet/3qxruyvrc/200510/archive>)

(15)の場合は、「給与振込みを忘れる」一大事を起こした、問題の人物である経理担当の人を出発点としながら、間接的に会社を批判しているのである。というのも、「経理担当者」を通して経理担当者の所属している会社の責任を追及しているからである。表面的には「会社も会社だ」とだけ言っているが、暗に「経理担当の人も経理担当の人だ」ということが前提とされているのである。すなわち、社員と会社が一般の社会通念による連帯関係にあるため、この事件は経理担当者の所属する会社にも責任があって会社も非難されるのである。なぜかという、さかのぼって責任を追及すると経理担当者という役職については、会社の選考人事が妥当ではなく、慎重さを欠いたため、この事件が起こったと言えるのではないだろうか。すると、(15)は、経理担当者がしっかり責務を果たさないことが一番の問題であるのだけれども、会社がこのように大切な事をそんな人に担当させたことに対して、慎重さに欠けるのではないか、というニュアンスが含まれると考えられる。

ここからわかるように、(15)は、因果関係の連想をも含んでいる。メトニミーによる概念の基盤に基づく表れである<sup>17</sup>。つまり、問題の人物である経理担当者という部分を参照点として焦点化し、会社を示唆し会社にも責任があるとみなす。したがって、(15)において、「会社も会社だよなあ」には、会社に対する残念な気持ちが含まれていると言える。

また、次の(16)の場合も因果関係の連想を含んでいる。これは、有線の業者は、客がくじ引きで「有線の機械と工事

代が無料」という2等賞に当たったことにかこつけて、必死にその客に有線の契約を勧誘する場面である。

(16) 「すごいですよ！」と言ってそのお客に有線の契約を勧めて、サインさせようと必死だ…悪どい奴も奴だが、騙される馬鹿も馬鹿。

(<http://kirara.no-jp.com/nikki/nikki/nikki.php>)

(16)の場合、話者は悪どい業者がずるい手段で商売するのは悪質であるが、ちょっとした得をしようと思うお客さんの方も悪いという意味を表している。

業者が、客が賞に当たったのにかこつけて有線の契約を迫るというような商法は、客を騙す可能性があるし、合法的商法だとは言えない。しかしながら、わずかな利益を得ようとしてかえって大損を招くことになるということは、道理に合わない。ここから、業者と客双方は似たり寄ったりであり、普通ではないと言える。但し、客がそのわずかな利益に目がくらむことがなければ、悪どい業者に騙されることはないだろうし、わずかな利益に眼がくらむ客がいなければ、このような業者もいないだろう。要するに、このような客がいるからこそ、このような悪どい業者が存在するということを暗示している。

そこで、(16)では、問題の物事である悪どい業者のことを焦点化して目先の小さな利益を貪る客のことを当てこすっていると思われる。

(17) 学校も学校なら制服ごときに群がる生徒も生徒だ!

(再掲(2))

([http://www.izumito.com/sk/li\\_miya0009.html](http://www.izumito.com/sk/li_miya0009.html))

そして、(17)の場合は、女子高生の制服について取材を行った際、「制服をおしゃれなものにモデルチェンジしたら優秀な生徒が集まり、偏差値が上がる」「制服のデザインで高校を決める」などといった話を聞いた場面での一言である。『少子化でいくら生徒を集めるのが難しい状況であっても、また私学の生き残りをかけた対策であっても、おしゃれな制服で生徒を集めるというやり方は取るべき手段ではない。このような安易な対策に走る学校側も悪いけれども、それに乗せて「制服のデザインで高校を決める」といった生徒側も悪い』と話者は言う。上記からわかるように、学校側も生徒も考え方は一般的ではない。

特に少子化で生徒を集めるのが難しい状況下とはいえ、私学の生き残りをかける方法としては、学校自体の設備や教師の素質・レベルや採用する教材などの面を工夫し、学校全体のレベルの底上げを指すのがまっとうではないだろうか。また学生は自分の将来のために、学校を選ぶのが一般的であろう。

従って、(17)では、制服に工夫を凝らして生徒を集める学

校を問題の対象として取り上げて制服ごときで学校を選ぶ生徒のことをそれに引比べて、両方は似たり寄ったりであり、普通ではないと批判する。つまり、学校側が制服に工夫を凝らして生徒を集めるのは合理的ではないが、制服で学校を決める生徒にもあきれる、という意味を持っているのではないだろうか。

### 3.2 まとめ

上記の「XもX、YもY」構文の考察・分析より「XもX、YもY」構文という表現は人間の経験や一般の社会通念や知識ベースと絡み合っていることが見られる。X要素とY要素がともに一般の社会通念や常識から逸脱し、あきれるほどであるという気持ちを持ち、X要素とY要素両方が似たり寄ったりであるという意を表す。特に、人と関係する場合は、非難する意味が強く皮肉が込められる。但し、それはXもしくはY要素の意味の総和から導き出すことができない。表面的に表される「X」要素と「Y」要素は、一見直接的な関係がないように見えるが、実際にその背後で一連のプロセスを通して関係付けられ、それらと関係する他の部分は背景化されていることになる。

話者の経験や知識などによって両方が似たり寄ったりであると非難したり批判したりすることを「も」で表す。「も」の示すX要素とY要素は、類似関係もしくは部分・全体の近接関係にある。二つの概念関係は、所属関係もしくは所有関係や親子関係などの連想的近接性によって関係付けられており、話者の持っている一般の社会通念や経験や常識などから意味付けられる。人間の認知的な営みと密接な関連がある。そのため、X要素とY要素は概念化者である話者の認める基準によって、同類または類似の物事であると言える。また、「XもXだ～」が前提として提示されるが、背景化される場合がある。その場合、表面的には「YもY」だけを言うけれども、言外には「XもX」が前提にある。

したがって、「XもX、YもY」構文という表現の「も」も「同様または類似の物事を表す」というとりたて詞「も」のプロトタイプの意味と特徴を持っていると言える。「XもX、YもY」構文の用法は、とりたて詞「も」が構文としての意味用法であると考えられる。

さらに、この用法では、問題の物事もしくは人物を出発点として、それと関連する他の物事を表している。これは認知的に問題の物事もしくは対象の方が知覚されやすいからである。そこで、「XもX、YもY」構文の用法は「認知的際立ち」の原則<sup>18)</sup>に従っており、際立った物事を参照点として焦点化するものであると言える。このように、参照点として焦点化する物事と実際に指示する物事が食い違うという現象は、「XもX、YもY」構文にも生じていることが明らかである。よって、「XもX、YもY」構文の意味用法

については参照点構造の概念で説明することができると思われる。

以上の「XもX、YもY」構文の考察・分析に基づいて、「XもX、YもY」構文は固定した組み立てと特有の意味があって、その組み立て自体には全体性と固有の意味があることがわかった。話者の認める<sup>19</sup>基準でわざわざ何かを伝える意図があるのではないか。特徴的には、主語と述語が同一人物・組織からなり、X要素またはY要素を別々にわけて解釈することができず、組み立ての中でいかようにも変わり得る。意味的には、二つ(以上)<sup>20</sup>の物事がともに一般通念や規範を逸脱しており、似たり寄ったりであるという意味を表す<sup>21</sup>。よって、二つの物事(命題)が類似している物事であると言える。但し、それはただの類似ではなく、話者、いわゆる概念化者の主体的解釈による類似である。そのため、命題の類似性が見られない。つまり、「XもX、YもY」構文の表現において、話者(概念化者)の解釈が反映されていると考えられる。

次節では特殊な組み立て「XもX、YもY」構文の用法について参照点構造の観点から分析していく。

#### 4. 「XもX、YもY」構文と参照点構造

第3節での「XもX、YもY」構文の考察・分析の結果から「XもX、YもY」構文にも参照点として焦点化する物事と実際に指示する物事が食い違うという現象が生じていることがわかった。そこで、本節では、「XもX、YもY」構文の意味関係を参照点構造を用いて説明する。

ここでは、(18)を取り上げ、説明する。問題である「子供」が、認知的に際立たされて参照点(R)として「も」によって焦点化され、それと関連のある指示対象(T)の親を示していると言える。すなわち、参照点構造における指示対象は親である。しかし、すでに第3節で見たが、親と子供が一般の社会通念による連帯関係のため、「親」は、「XもX、YもY」構文の表現では前提として焦点化される「子供」の「活性領域(az)」となっている。そこで、「親」は、連想的近接性によって参照点である「子供」と関係しており、子供の引き起こした事件という認知領域に間接的に関与していると言える<sup>22</sup>。

(18)自分が悪いことをしたのを棚に上げて先生の怒り方を親に訴える子供も子供なら、自分の子供が悪さをしたことを棚に上げて先生をやっつけようとする親も親だと思う。

([http://www.nichimappress.com/douse/2004\\_douse/douse\\_11.html](http://www.nichimappress.com/douse/2004_douse/douse_11.html))

Rは子供：参照点→Tは親：指示対象－活性領域。

Cは筆者。

Dは子供が悪いことをしたのにそれを棚に上げ先生の怒り方を親に訴えることに相当する。

点線の矢印は、子供→親への心的経路(mental path)を表す。

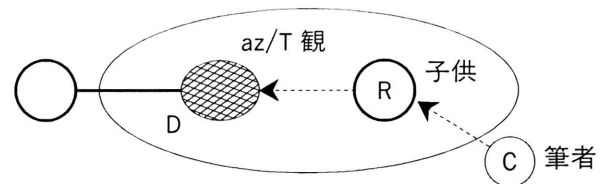


図2 参照点構造 (Langacker1993: 33)

(19) 資格も資格なら出席者も出席者だ、…

(<http://www5b.biglobe.ne.jp/~isam/diary/200409.html>)

Rは資格：参照点→Tは出席者：指示対象－活性領域。

Cは出席者。

Dは環境カウンセラーのようなセミナーに相当する。

点線の矢印は、資格→出席者への心的経路(mental path)を表す。

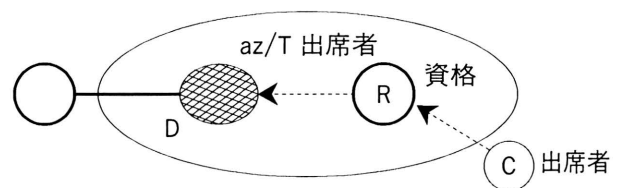


図2 参照点構造 (Langacker1993: 33)

(20) ~報告書を早急に提出して下さい。このまま提出しなかったら怠慢という契約違反のため法的処置をとりますよ。(略)毎月教えた内容や、先生、生徒、保護者の一言を書いた報告書を郵送しないとだめなんだけど、めんどくさくって教えた内容しか書いてなくて～でも。8ヶ月もほっとく会社も会社だよー。っと責任転嫁。

(<http://blog.so-net.ne.jp/mikisuke/2006-05-29>)

Rは筆者自身：参照点→Tは会社：指示対象－活性領域。  
Cは筆者自身。

Dは仕事の報告書を提示していないということに相当する。

点線の矢印は、自分→所属の会社への心的経路(mental path)を表す。

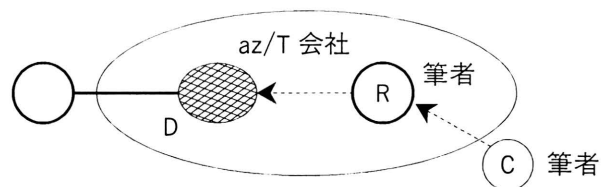


図2 参照点構造 (Langacker1993: 33)

(21) 母：お父さんとケンカしちゃった。娘：お父さんもお父さんだけど、お母さんもお母さんだよ。(テレビCM)  
(再掲(4))

Rはお父さん：参照点→Tはお母さん：指示対象－活性領域。

Cは娘。  
Dはお父さんとお母さんがまた喧嘩しちゃったということに相当する。  
点線の矢印は、お父さん→お母さんへの心的経路 (mental path) を表す

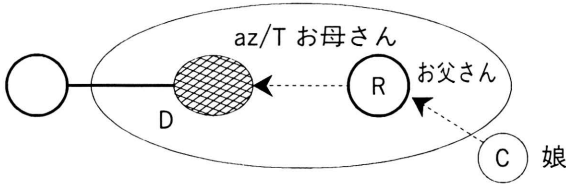


図2 参照点構造 (Langacker1993 : 33)

(22) (略)学校も学校だね、茶髪・ピアスの生徒をなんて許してたんだろう？ そんなアホが学校に来たら即刻叩き出すべきだったね。校則以前の問題だ。なのに後付けで「原則禁止」って何じゃいな？…言う以上は「全面禁止」ってハッキリ仰いな。

(<http://blog.goo.ne.jp/gonsela/e/decl862643edc8d7e180c385720f5510>)

活性領域。  
Cは筆者。  
Dは茶髪・ピアスが禁止であることに相当する。  
点線の矢印は、茶髪・ピアスの生徒→学校への心的経路 (mental path) を表す

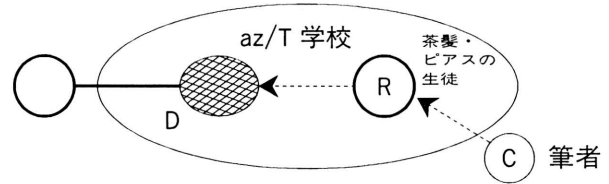


図2 参照点構造 (Langacker1993 : 33)

以上の参照点構造による分析から、指示対象 T と活性領域 az とは一致しない場合があることがわかる。例えば、(22) の場合、実際に指示対象 T の学校は学校の教員や生徒指導の先生である。これは、学校という機関でその中の人間やそこに所属する教員などを表すのである。メトニミーの近接性によるのである。上記の分析結果を表にまとめると次のようになる。

Rは茶髪・ピアスの生徒：参照点→Tは学校：指示対象ー

参照点概念による役割関係 例	焦点化される問題のもの→参照点 (R=tr)	引き起こしたことや事情→認知領域 (D)	問題のものに関連する物事→実際の指示 (対象：活性領域) (T : az)	焦点化(R)と指示対象(T)の関係→連想的近接性	焦点化される参照点と活性領域との関係	前提
(18)自分が悪いことをしたのを棚に上げて先生の怒り方を親に訴える子供も子供なら、自分の子供が悪さをしたことを棚に上げて先生をやっつけようとする親も親だと思ふ。	子供	子供が悪いことをしたこと	親	親族関係または所有関係	一般通念によりそのような子供を育てた親もその程度である。	子供も子供なら
(19)(略)。資格も資格なら出席者も出席者だ。	資格	環境カウンセラーのようなセミナー	出席者	所有関係	資格自体は大したものではないので、それを知らされた出席者はそのセミナーに対して大したことではないような反応や行動なども悪い。	資格も資格なら
(20)でも、8ヶ月もほっとく会社も会社だよー。っと責任転嫁。	筆者 (会社の一員)	仕事の報告書を提出していないこと	会社	所属関係または所有関係	仕事のことであるし、会社の責任転嫁でもある	筆者であるが背景化される
(21)お父さんもお父さんだけど、お母さんもお母さんだよ。	お父さん	お父さんとお母さんがまた喧嘩しちゃったこと	お母さん	夫婦関係	けんかする相手なので、直接関係しあっている。二人とも似たり寄ったりである。	お父さんもお父さんだけど
(22) (略) 学校も学校だね、茶髪・ピアスの生徒をなんて許してたんだろう？ (略)	茶髪・ピアスの生徒	茶髪・ピアスが禁止であること	(T) 学校→学校の関係者 (az) Tとazが違うから「学校→」が省略できない。	所属関係または所有関係	茶髪やピアスをつけて学校に来た生徒が悪いが、校則があいまいだから、学校自体にも責任がある。	茶髪・ピアスの生徒が前提化される。

表1 「XもX、YもY」の参照点構造による分析のまとめ

参照点と特殊な組み立て「X も X、Y も Y」との関係は、次のようにまとめられる。

- 1) 問題の対象である物事の方が際立つので、認知的な際立ちが与えられて tr として焦点化され参照点となる。
- 2) 実際の指示対象は参照点ではなく、それと関連する他の対象である。その指示対象は実際に参照点の活性領域である。メトニミー表現の表す対象がほとんど活性領域と重なっているので、参照点と関わりのある指示対象を活性領域として表すのである。
- 3) 参照点と活性領域が「も」によって提示されて、参照点構造では太線で表示される。

## 5. 「X も X、Y も Y」構文の意味用法ととりたて詞「も」との相互関係

拙著「とりたて詞『も』の意味——認知意味論の観点から」王 (2006) で、とりたて詞「も」のプロトタイプ的意味は、前提となる先行文が明示され、それと同様または類似の物事を表すとした。第3節の考察・分析の結果より、特殊な組み立て「X も X、Y も Y」において「も」の表す2つの物事(命題)は、意味的には「二つの物事は似たり寄ったりである→概念化者による同類化」であり、特徴的には類似性があるということがわかった。ここから「X も X、Y も Y」構文の意味用法は、類似性という点について、とりたて詞「も」のプロトタイプ的意味と同じであるといえる。本節では、第3節の「X も X、Y も Y」の例を考察・分析した結果に基づいてとりたて詞「も」との相互関係を次のようにまとめる。

### 5.1 とりたて詞「も」との共通点：

- 1) 同じように二つの物事を非難したり批判したりして、両方が似たり寄ったりであることを表すので、意味的には同様または類似の物事を表すと言える。とりたて詞「も」のプロトタイプ的意味「同様または類似の物事を表す」と一致する。
- 2) 特徴的には、二つの物事には類似性や関連性がある、「も」で二つの物事をつなぐ。
- 3) 先行文が前提として提示される。それが背景化される場合があるが、暗に「X も X だ」を前提として X を指示している。
- 4) 表面的には「Y も Y」だけを言う場合、その裏には「X も X」という含みがある。

例：(23)あなたが行けば、私も行く。

(24)子供も子供なら、親も親。

(25)陳：荷物は全部ありますか？忘れ物をしないようにしてください。

横田：全部あります。

山田：私も大丈夫です。

(26)めんどうくさがりな私…でも、8ヶ月もほっとく会社も会社だよー。と責任転嫁。(20再掲)

以上から特殊な組み立て「X も X、Y も Y」の用法が意味的と特徴的にはとりたて詞「も」と共通点を持っており、深く関係していることがわかった。

### 5.2 とりたて詞「も」との相違点

- 1) 固定した組み立て「X も X、Y も Y」がある。その全体性と「X も X、Y も Y」構文自体の持つ特有の意味がある。
- 2) 一般通念や常識を逸脱している場合によく使われる。特に、人と関係する場合には、非難する意味が多く、皮肉が込められるという特有の意味がある。
- 3) 組み立てでは、主語と述語が同一人物・組織(2つのX要素もしくは2つのY要素)からなる。
- 4) 認知的際立ちの原則に従っている用法であるが、認知的に際立つものを参照点としてそれと関係の深い別のものを表すのである。
- 5) 概念化者の主体的意味が直接的に反映されているため、文そのものからは命題の類似性が見えない。
- 6) 提示される物事概念関係がただの「同様または類似の物事」だけではなく、概念化者の認める基準によって X と Y 要素が関係付けられており、同類または類似の物事として「も」で焦点化する。

例：(27)田中さんは小学校の先生です。山田さんも小学校の先生です。

(28)学校も学校なら制服ごときに群がる生徒も生徒だ！

(22再掲)

上記からわかるように、この用法は、意味的・特徴的に、とりたて詞「も」と共通点を持っており、とりたて詞「も」のプロトタイプ的意味と同じ意味を表す。意味と形式との対応関係を重視する認知言語学の立場からみると、特殊な組み立て「X も X、Y も Y」構文の用法はとりたて詞「も」の用法の一つであると言える。

## 6. まとめ

以上、特殊な組み立て「X も X、Y も Y」について、認知意味論の観点より考察して説明することを試みた。この用法は概念化者の主体的意味が「X も X、Y も Y」の組み立てによって直接反映されるため、文そのものから客体の類似性は見えない。以上の分析結果によって、とりたて詞「も」のプロトタイプとの相互関係は第5節にまとめたよう

になる。

「XもX、YもY」構文のような表現は人間の認知の営みに関わる概念から生み出されたものであり、実生活の社会環境上の意味付けや概念化者の経験や知識などの観点より理解されることである。参照点概念という人間の基本的な認知能力が、「XもX、YもY」という形式の存在を動機づけているのではないかと考えられる。また、「XもX、YもY」構文の意味用法はとりたて詞「も」が構文としての用法であると言える。「XもX、YもY」は事態が、話し手（概念化の主体）にとってどのような視点を置いていることに準拠する。つまり、話者がどう捉えたかによるという立場を取る表れであると言える。また、「も」は経験によって概念化のされ方は異なり得るということでもある。

### 注

- 1 Paul Kay 1997, pp1-48
- 2 理想的認知モデル (idealized cognitive model: ICM) は、あるものや語を理解し使用するためには、社会制度や文化慣習などをもとに、単純化・理想化して対象を捉える(意味付けする)経験の鋳型である。これは、慣習的に支えられて生じてきた文化的・社会的知識が、新しいものの適切な理解、すなわちそのものの意味付けに重要な役割を担っている。例えば、日本の文化では、お客さんに距離をおいて接すべきことが敬意の表れとされ、「お宅」や「～殿」や「そちら」など、相手の名前に方角や住まいなどを表す言葉を付けて間接的に指示する。つまり、直接的に指示を避け、敬意もしくは丁寧さを明示する古くからの用法である。最近では、レストランやコンビニなどでよく聞こえる「ご注文のほうよろしいでしょうか」や「デザートのほうお持ちしてもよろしいでしょうか」など「～のほう」がよく使われる。これは、さきほど述べたような日本の社会的・文化的知識として共有されている古くからの用法の拡張であると考えられる。
- 3 フレーム (frame) は、ある概念を理解するのに前提となるような知識構造のことである。語の意味や文、テキストの意味構築において重要な役割を果たすものである。
- 4 認知意味論は、意味を概念化という心的経験と捉えることから、辞書の意味と百科事典的知識とは峻別することはできない。人間が世界を理解し意味付けようと努めるとき、社会的・文化的慣習や知識と深く関わる百科事典的知識が大きな役割を果たす。
- 5 人間の認知活動や精神作用などに関わる身体的な経験や個人レベルの価値などを含めた種々のフィルターを通して意味が構築されてくるものである。
- 6 言語を使って自分の把握したことを表現する人間一般である。すなわち、ある対象・出来事に対してどのように捉えているか(解釈しているか)、の言葉の使い手である。
- 7 これは概念化者、いわゆる認知主体が実際に注意を向ける対象や目標を指示するので、本稿では指示対象と表す。
- 8 認知領域 (cognitive domain) は、身体性に依存して特徴づけられることで、ある焦点を当てられるべき新しい意味を理解するのを促す前提知識であると言える。例えば、「島」の意味を理解するためには、海と大陸の地形という知識が必要である。
- 9 これらは、Langacker (1993) による「認知的際立ち (cognitive saliency)」の原則に従っており、際立ちの高いものを参照点としていることであると考えられる。

- a. human > non-human
- b. whole > part
- c. concrete > abstract
- d. visible > non-visible

- 10 メトニミーとは、典型的には、2つの要素が近接性の連想に基づいて「認知的なまとまり」をなすとき、認知的に際立つ方が他方を表す関係のことである(原口2000: 186-187)。そのため、メトニミーの概念によって、われわれはあるものを、他のものと関連づけて概念化することができる。
- 11 詳しくは谷口 (2003: 119-151) を参照。
- 12 原口他(2000: 187)は、メトニミーの第一義的な役割は、ある特徴を目印にして対象を指し示すことであるがただ指し示すだけがその機能ではなく、話者がどのような特徴をプロファイルしているかという点で、話者の解釈を込めた表現となっている。また、2つの要素が認知的なまとまりをなすため、共に同じドメインに属することになる、と述べている。
- 13 Langacker (1995) はこれを「プロファイルと活性領域の不一致」と呼んでいるが、本稿では「焦点と活性領域の不一致」と定義する。
- 14 Langacker (1993: 30; 1995: 28) を参照されたい。
- 15 原口他(2000: 189)では、活性領域は必ずしもプロファイルされたものの部分である必要はなく、ある存在物の支配領域であればよい、としている。
- 16 X、Y は反復の語を表す。
- 17 メトニミーの概念は近接関係の連想や因果関係の連想を含むのが一般的である。
- 18 詳しくは、Langacker(1993)とKovecses and Radden(1998)、谷口 (2003) などを参照。
- 19 話者の認める基準とは、話者が一般通念や経験や常識などによって判断して意味付けし表すことである。
- 20 ほとんど2つのことが多いが、複数であることをここではさすにとどめる。
- 21 とりたて詞「も」は他の物事との差異を浮き彫りにして、特にそれを上げる機能がある。つまり、極端な例示を表すのである。
- 22 原口他 (2000: 189) によると、az は必ずしもプロファイルされたものの「部分」である必要はなく、ある存在物の「支配領域」(domain) であればよい。言い換えると、一般知識や常識やコンテキストなどによって参照点とする物事の認知領域に関係すればよい。

### 参考文献

- 原口庄輔ら。(2000).『ことばの仕組みを探る生成文法と認知文法』研究社。
- 河上誓作。(1996).『認知言語学の基礎』研究出版社。
- Kay, Paul. (1997). "Words and the Grammar of Context." Stanford: Center for the Study of Language and Information."
- Langacker, Ronald W. (1993). "Reference-Point Constructions." *Cognitive Linguistics*4: 1-38.
- Langacker, Ronald W. (1995). "Raising and Transparency" *Language*71. 1-62.
- 松下大三郎 (1930)『標準日本口語法』中文館書店
- 沼田 善子 (1986)『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社
- (1995) つくば言語文化フォーラム編『「も」の言語学』ひつじ書房
- 王淑貞。(2004).「現代日本語「も」の意味・機能の派生に関する研究」修士論文。
- 王淑貞。(2006).「とりたて詞「も」の意味——認知意味論の観点から」『九州大学大学院比較社会文化学府紀要』第19号 pp. 157-174 .

- 王淑貞, (2006), 「認知意味論によるとりたて詞「も」—「XもX」という特殊な組み立ての意味用法について(1)—」『社会言語科学会第18回発表論文集』 pp168-171.
- 佐久間鼎, (1967), 『現代日本語法の研究』.
- 高橋太郎, (1978), 『「も」によるとりたて形の記述的研究』.
- 谷口一美, (2003), 『認知意味論の新展開』 研究社.
- 辻幸夫, (2002), 『認知言語学キーワード事典』 研究社.

### 辞書類

- 金田一京助・柴田武・山田明雄・山田忠雄, (1993), 『新明解国語辞典(第四版)』, 日本三省堂授権 鴻儒堂発行.
- 近藤いね子・高野フミ, (1994), 『小学館プログレッシブ 和英中辞典』, 小学館.
- 陳博陶(編), 于乃明・林水福・陳先智・鐘芳珍・(日) 今井幹夫 編集委員, (1997), 『新時代日漢辭典』, 大新書局.
- 日本国語大辞典第二版編集委員会, (2001), 『日本国語大辞典(第二版第十二卷)』, 小学館.
- 松村明(編), (1971), 『日本文法大辞典』, 明治書院.

- 西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫(編), (1994), 『岩波国語辞典第5版』, 岩波書店.
- 渡邊敏郎・E. R. Skrzypczak・P. Snowden, (2003), 『新英和大辞典』, 研究社.
- 北原保雄(編), 小林賢次・砂川有里子・鳥飼浩二・矢沢真人 編集委員, 加藤博康編集協力, (2002), 『明鏡国語辞典』, 大修館書店.
- グループ・ジャマシイ(編著), 徐一平(代表)・陶振孝・巴爾維・陳娟・勝軍(訳), (2002), 『中文版 日本語文型辞典』, くろしお出版.

### 付記

本稿は2006年社会言語科学会第18回大会における発表原稿を加筆・修正したものである。発表時において貴重なコメントをくださった方々にここで厚く御礼を申し上げる。

## The Idiomatic Use of the Japanese Particle “MO” : With Special Reference to “X mo X” and “Y mo Y”

Shu-chen WANG

The purpose of this paper is to examine the meaning of “X mo X” and “Y mo Y” of Japanese particle “MO” from cognitive semantics viewpoint and to develop the relation with the prototype of the Japanese particle “MO”.

The following facts were found with regard to the “X mo X” and “Y mo Y” construction.

1. The usage of “X mo X” and “Y mo Y” construction expresses to blame X and Y that are both much alike. X and Y are outrageous.
2. X and Y are related through a series of process. The relation of the concept of X and Y is put on associated close proximity by metonymy.
3. In addition, this usage has the common feature in meaning and the feature of “mo”, and shows the same meaning as a prototype meaning of “mo”.

Thus the “X mo X” and “Y mo Y” construction has constructional meaning and conventional structure. This usage of “X mo X” and “Y mo Y” construction is also one of the usages of the Japanese particle “MO”.